

逆予測(Reverse Prediction)

☐所要時間	60～90 分程度
☐主なスキル	リーディング、ライティング
☐形式	各自の作業ののち、prediction をペアワークでシェア
☐概要とねらい	
一般的に prediction という、文章の先を予想する活動を指しますが、ここで提案するのはその逆、つまり、文章の最後を読んでそこに至るまでにどのような出来事があるのかの結末にたどり着いたのかを考える活動です。例えば、若きダスティン・ホフマン主演の『卒業』という古い映画がありますが（平成世代の方にはわからないかもしれませんね、すいません）、この映画の最後の場面は、教会での結婚式に汚い格好の若者（ダスティン・ホフマン）が乱入し、これから結婚の宣誓をしようという花嫁を教会から連れ出す、というものです。この最後の場面だけを最初に見て、この衝撃的な結末に至るまでに一体どのような展開があったのか、二人がどのように出会い、葛藤したのかを想像するのが、Reverse Prediction になります。 ただし、前の展開をなんでもよいから適当に創作していいということではありません。重要なのは、結末の文章を注意深く読み、そこに隠されているヒントから前の展開を立ち上げることです。ここにこの活動の「肝」があります。まず、結末の文章を丹念に読むことが必要なのです。ですので、この活動に使用する教材は多読用のリトールド版よりも、細かい心理描写や背景説明が省略されていないオリジナル版がお勧めです。多読活動の合間に投げ込む精読活動として適しています。 私がこの活動に使用したのは、Raymond Carver の“A Small, Good Thing”という短編小説です。この小説の最後の5つのパラグラフには、その前の展開を予想する鍵となる“Ann was suddenly hungry”、“they were tired and in anguish”、“He told them what it was like to be childless all these years”といった表現が散りばめられています。注意深い読者は、これらのセンテンスに込められた登場人物たちの心の痛みに思い至ります。これまで何年もこの活動を授業で実践していますが、かなり高い確率で学生たちは主人公夫婦の深い悲しみの原因を探り当てます。彼らは、テキストには明確に語られていないこと＝「空所」(Carver の短編の例で言えば、登場人物の深い悲しみの原因)を埋めるようテキストから要請され、能動的にテキストの完成に参加する読み方をしていると言えます。これは読者反応理論の代表的論者ウォルフガング・イーザーが提唱する「空所を補う読書」です。Reverse prediction は、結末からその前の展開を予想させることで、学習者に「空所を補う読書」を実践させることができます。「空所」を補うためには、英語を正確に、しかも深く読まなければなりません。英語の「精読力」を養うには最適の活動だと思います。 とはいえ、作者が書いた通りの展開を正確に当てることばかりに学習者の注意を向けると、cheating（ネット検索で作品全体のあらすじを調べてしまうなど）を誘発すること	

になりますので、注意が必要です。活動のねらいは、あくまで結末部分の英文を精読し、行間を読み、想像力を働かせることにあります。ここが達成できていれば、結果として作者が書いたのとは異なる展開を予想したとしてもそれは許容範囲内と考えるべきでしょう。

英文を読んだ後、予想した内容を英語で書く、あるいはペアワーク等でパートナーに英語で語って聞かせるといった活動につなげることも可能です。注意深く読み、そこから予想した内容を書き、話す、さらにパートナーの語る内容を英語で聞くわけですから、4技能を無理なく組み合わせ、フル稼働させることができます。

参考文献：『行為としての読書：美的作用の理論』W・イーザー著、轡田収訳（岩波書店, 2005）

□事前準備（必要な教材、器具など）

私が使ったのは、Raymond Carver の“A Small, Good Thing”という短編小説です。結末部分に物語の肝になる記述があり、結末だけを読んでそれまでの展開を予想させると面白そうな本や映画が適しています。上記で紹介した映画『卒業』も使えるでしょう。

□手順

1. 選んだ本や短編小説の結末部分のみをコピーし、参加者に読ませる。授業外の宿題にする場合は、ネット検索を避けるためタイトルや著者名を伏せ、さらにネット検索して前の部分を読まないように注意すること。前の展開を正確に当てることが目的ではないと周知徹底することが重要。
2. 必要なら、配布した結末部分の英文の内容確認を行う。
3. 前の展開の予想を書かせる。参加者の英語レベルに合わせて日本語、英語どちらを用いても構わない。
4. 参加者を列に並ばせる（20人クラスなら、5人ずつの列を4列。30人クラスなら、5人ずつの列を6列つくる）。隣の列の人とペアを組み、お互いの予想をシェアさせる。
5. 1組目のシェアが終わったら、ペアをローテーションする。1,2列、3,4列がそれぞれペアを組んでいた場合、1列目と3列目の人が前に1人ずつずれる。1番前の人は列の1番後ろに移動。これを5回繰り返す。すると、5人のクラスメートと予想をシェアすることができる。
6. 英語で予想を書かせた場合は、英語でパートナーに語らせる。5回のうち最後の2回は書いたものを見ないで語らせるとスピーキングの練習になる。
7. シェアが終わったら、聞いた中で最も印象に残った prediction が誰のどのような prediction だったかを書かせてもよい。リスニング活動の確認ができる。

【学生の反応】

学生による Prediction の解答例の中から優れたものを以下に紹介します。

- Howard と Ann は非常に困った事態、もしくは非常に危険な事態におちいって、そこから逃げてきた。その逃げこんだ先がパン屋である。これは冒頭で二人がコートを脱いでいるシーンがあるが、この部分からどこから（寒いところなど）来て、ようやく安心できる環境にたどりついたように感じたためである。また、Howard が Ann のコートを脱がせてあげているのも、Ann の精神状態がまいってしまっているように感じた。The baker がパンを差し出してあげているのも、どこから来た人に対する配慮に感じた。
- Ann と Howard は地道に働いていたが、身近な人の裏切りにあい、仕事をなくし、住んでいたところも追い出されてしまう。2人は街を転々とし、生活していたが、体力的にも精神的にも限界に近づいていた。そして偶然立ち寄ったパン屋で the baker に出会った。
- Howard と Ann は寒いところからパン屋に入ってきたようだ。空腹ぶりからずいぶん歩いてきたに違いない。何故2人はそんな思いをしたのだろうか。2人はパン屋の話に注意深く聞いている。パン屋の話に関係あるのかもしれない。パン屋の話は、さみしさと仕事の誇りだ。そこから察するに、2人の愛情は失われつつあるか、逆にかけおちでもしてきたかのどちらかだ。あるいは、2人の子供に関係あるかもしれない。
- Ann と Howard との間にできた子供がなんらかの理由で亡くなってしまい、Howard は Ann を気遣って、何か食べさせてやりたいと思い、パン屋に連れて行った。
- アンはハワードと結婚し、幸せな結婚生活を送っていたが、ある日、アンは子供をさずかり、大事に育てていたところ、ちょっとした事故で子どもを流産してしまう。悲しみにくれ、食事も[喉を]通らなくなったアンをハワードは心配する日々が続いた。アンとハワードはある寒い日にたまたま寄ったパン屋で、その主人と出会うことになる。
- Ann と Howard は結婚していて子供もいた。しかし、何かこの bakery がかわってその子供が死んでしまった。子供が死んだことによって夫婦は悲しみに暮れ食事もうるくにとっていなかった。

（以上は、『読書』としての楽しみを広げるための多読指導：＜英語＋文学＞教師の視点から』『多読で育む英語力＋α』(pp.135-170)より再録

- アンとハワードが一言も話さず反応しているので、すごく絶望していると思った。パン屋の“what it was like to be childless all these years”を慰めの言葉だと思ったので、二人の子どもが死んでいなくなったと思った。
- まず全体的にハッピーな感じではなかったので、誰かが亡くなるか、二人が別れ話

をしているという方向で考えました。次に、パン屋が店主に二人にパンを食べるよう何度もすすめているので励ましている風に見えました。そして、決定的だと思えた文は、店主が語っている際に、「子どもがいない」というような発言をしていたので、二人のカップルの子どもに何かあったんだと解釈し、赤ちゃんが流産した設定にしました。また、「anguish」という単語も参考にしました。店主が花屋じゃなくてパン屋で良かったという発言は、悲しみにくれる人々をパンを食べさせることで元気にするという意味がこめられていると考えました。

(以上は、「読書指導の場としての多読授業：“Reading for pleasure”というマジック・ワードを再考する」『慶應義塾外国語教育研究』第8号, 69-90より再録)

【応用例】

Macmillan Readers 3, elementary level 所収の *Frankenstein* を使用した応用例を紹介します。

1. Chapter 2 までを読むよう指示する。
2. 間を飛ばして Chapter 9 とその次のページに書かれている手紙を読ませる。
3. 飛ばした部分にどのような展開があったか推測させる。Chapter 9 に書かれていることを注意深く読み、この結末に至るまでにこういうことがあったはずだ、と推理させる。まずは各自考えさせたのちに、ペアやグループワークで話し合わせてもよい。
4. 最後に、飛ばしたところを読ませる。
5. 自分の推理と実際の物語を比較させ、振り返りコメントを書かせる。

【その他備考】

➤ この活動については、以下の先行研究をご参照ください。

深谷素子(2010).『『読書』としての楽しみを広げるための多読指導：＜英語＋文学＞教師の視点から』『多読で育む英語力＋α』(pp.135-170) 小林めぐみ., 河内智子., 深谷素子., 佐藤明可., & 谷牧子(成蹊大学国際教育センター多読共同研究プロジェクトグループ)(編著), 東京:成美堂.

深谷素子(2011).「読書指導の場としての多読授業：“Reading for pleasure”というマジック・ワードを再考する」『慶應義塾外国語教育研究』第8号, 69-90.

倉林秀男・関戸冬彦・深谷素子(2015).「アメリカの文学作品を教育にどう活かすかーその方法論を巡ってー」『杏林大学研究報告教養部門』第32巻, 75-87.

➤ この活動は以下の英語教科書に収録されているので、ぜひご活用ください。

『English Through Literature：文学で学ぶ英語リーディング』（斎藤兆史、中村哲子編注、研究社、2009）、Session 8 「Raymond Carver の短編小説：小説の結末部分を読む」（pp. 33-36）

（文責：深谷素子）